青少年育成センターだより
第一一七号　二〇二一・八・一五　発行

愛情は心の栄養

少年は両親の愛情をいっぱいに受けて育てられた。殊に母親の溺愛は近所の物笑いの種になるほどだった。

その母親が姿を消した。庭に造られた粗末な離れ。そこに籠ったのである。結核を病んだのだった。

近寄るなと周りは注意したが、母恋しさに少年は離れずに近寄らずにはいられなかった。しかし、母親は一変していた。

少年を見るとありったけの罵声を浴びせた。コップ、お盆、手鏡と手当たり次第に投げつける。

青ざめた顔。長く乱れた髪。荒れ狂う姿は鬼だった。

少年は次第に母を憎悪するようになった。哀しみに彩られた憎悪だった。

少年六歳の誕生日に母は逝った。

「お母さんにお花を」と勧める家政婦のオバサンに、少年は全身で逆らい、決して柩の中を見ようとはしなかった。

父は再婚した。少年は新しい母に愛されようとした。だが、だめだった。父と義母の間に子どもが生まれ、少年はのけ者になる。

少年が九歳になって程なく、父が亡くなった。やはり結核だった。

その頃から少年の家出が始まる。公園やお寺が寝場所だった。公衆電話のボックスで寝たこともある。そのたびに警察に保護された。

何度目かの家出の時、義母は父が残したものを処分し、家をたたんで蒸発した。

それからの少年は施設を転々とするようになる。

一三歳の時だった。少年は知多半島の少年院にいた。もういっぱしの「札付き」だった。

ある日、少年に奇蹟の面会者が現れた。泣いて少年に柩の中を見せようとしたあの家政婦のオバサンだった。

オバサンはなぜ母が鬼になったのかを話した。死の床で母はおばさんに言ったのだ。

「私はまもなく死にます。あの子は母親を失うのです。幼い子が母と別れて悲しむのは、優しく愛された記憶があるからです。憎らしい母なら死んでも悲しまないでしょう。あの子が新しいお母さんに可愛がってもらうためには、死んだ母親なんか憎ませておいたほうがいいのです。そのほうがあの子は幸せになれるのです」

少年は話を聞いて呆然とした。自分はこんなに愛されていたのか。涙がとめどもなくこぼれ落ちた。札付きが立ち直ったのはそれからである。

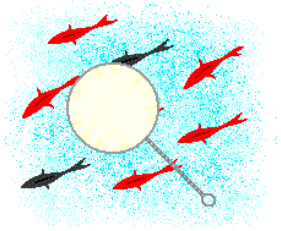
作家・西村滋さんの少年期の話である。

（「心に響く小さな五つの物語」　致知出版）

愛してくれた両親が亡くなり、義母も蒸発するという、この話のような厳しい環境の中でも、たくましく生きていける強い子どももいるでしょう。しかし、多くの子どもが西村少年のように非行に走るなど、上手く生きていくことは難しいことでしょう。

子どもにとって、温かい家庭があるということはとても大切なことです。特に、子どもの幼少期ほど親が愛情いっぱいに育てなければなりません。

人は、口から栄養を摂ることで、身体を大きくしたり、動かすことができますが心を成長させる栄養は愛情です。愛情は「心の栄養」なのです。子どもの心にいっぱいの栄養＝愛情をそそぎ込みましょう。



【文　責】青少年育成センター指導員　藤村

【問合せ】防府市教育委員会生涯学習課（TEL　〇八三五―二三―三〇一三）